ひと まち

新しいコミュニティの形

高齢者や子育て中の親が集まる場所はあっても、それぞれが孤立してしまいがちです。年代を超えて集まることができ、地域のつながりを深める拠点となるカフェが、かわつる商店街にオープンしました。

左側がキッズコーナー、右側が喫茶コーナー。みんなで同じ空間を共有します

川鶴地区の主任児童委員・上蓑礼子さん(54歳・川鶴三丁目)は、地域の中に、年齢・性別を問わず気兼ねなく交流できる場があれば良いのにと、常々考えていたそうです。

昨年1月、「商店街の空き店舗を、地域の拠点となるような施設として利用できそうだ」という話が耳に入り、早速、当時の自治会長・佐藤安夫さん(68歳・川鶴二丁目)と相談し、施設開設に向けて動き出しました。

5月、まず初めに、拠点となる施設をカフェとして一週間試験運営してみることに。そのときの利用者の反応を見て、「こういう場所は大事」と確信。志を共にする仲間と「チームひだまり」を立ち上げ、地域のために力を貸してくれる人を運営スタッフとして集めました。資金は、家を一軒一軒訪ね賛同者を募りました。「客が来るのか」「経営が成り立つのか」など、不安の声もありましたが、訪ねてみると、多くの人がこのような施設ができないかと待ち望んでいたことが分かりました。「東日本大震災で、避難生活を送っている方々をテレビで見て、地域の人同士の助け合いが大切なんだと痛感したんです。だから、みんなが集まることができる場所の開設は大賛成です」という声もありました。

前列左から2人目が上蓑さん

10月、ついに「コミュニティカフェ ひだまり」がオープン。一人で訪れた利用者からは、「ここに来るようになって、多くの地域の人と知り合いになりました」の声。「子どもが自由に遊べて、親もリラックスできて、友だちの家に来たみたいにのんびりくつろげます。心にゆとりが持てるようになりました」と、1歳の子どもを連れたお母さん。「最近は近所で子どもの声を聞くことが少なくなりました。ここで小さい子どもの元気な声を聞くと、自分も元気になります」という人もいます。「一人で来た方にはスタッフが声をかけてコミュニケーションを取っています」と、スタッフの中島茂さん(63歳・吉田新町一丁目)。

入口の前で、なかなか入ることができない人もいるとか。そんなときは、スタッフが積極的に声をかけます。店頭での呼びかけや、チラシの配布、口コミなどにより、今年に入ってからだんだんと利用者が増えてきました。「また来たよ！ と言われると、とても嬉しい」と、スタッフの神山智子さん(56歳・吉田新町二丁目)。ひだまりを拠点に、地域のきずながますます広がっていきそうです。

コミュニティカフェ ひだまり

川鶴2丁目11−1(かわつる商店街内)
火〜金曜日(祝日、年末年始を除く)
午前11時〜午後4時

喫茶コーナー

一人で、グループで、誰でも気軽に利用できます。カレー・焼きそばなどの軽食と飲み物があります。商店街内で買ったパンなどの持ち込みOK！ お茶を飲みながら、会話も弾みます♪

キッズコーナー

毎週金曜日の午後は、読み聞かせや手遊びなどの子育て教室を開催しています。おむつ替えベッドや授乳スペースもあり、安心です。

ひとまち ふおとニュース

能面に込める想い

来場者に説明する嶋田さん（右）

2月10日～13日、小江戸蔵里で能面展が開催されました。展示された12点の能面を制作したのは、古希を迎えた嶋田和則さん（宮元町）。10年ほど前、姪が打った能面を見たとき、惹かれるものを感じたそうです。若いときから彫り物に関心を持っていた嶋田さんは、6年前から能面師に師事して面打を重ねてきました。面打をするときは「とにかく集中して、無心になります」。左写真の2点は、昨年、厳島神社（廿日市市）の桃花祭御神能で使用されました。

翁の面（左）、猩々の面（右）

華やかなつるし雛が完成

「おひな様飾りを折り紙で作ろう」が、2月25日、中央公民館で行われました。作り方を教えたのは、川越シニア大学「小江戸塾」の皆さん。この日作ったのはつるし雛。見慣れた雛飾りにはない、花やウサギ、扇の飾りに、子どもたちは興味津々。「きれいなつるし雛ができてよかったです。家でお姉ちゃんともっと作って飾りたいです」と、長井麻稀さん（小学3年生・松江町1丁目）。講座が終わっても、他の飾りの折り方を熱心に聞いていました。

行って　会って　体験
気になるイベントや人を紹介

小江戸あるき

ひとまち

挫折こそ学びの宝庫

2月20日、市民会館で市制施行九十周年記念事業「経営セミナー」が、㈳川越青年会議所主催で開催されました。講師は前宮崎県知事の東国原英夫さん（54歳）。鳥インフルエンザや口てい疫などの非常事態を乗り切った東国原さんの話に、満員の観客が耳を傾けました。

幼少のころから知事時代までのエピソードを、ユーモアを交えて講演。その中で何度も出てきたのが、「不可能という文字はない」「ピンチをチャンスに」という言葉です。挫折こそ学びの宝庫と考える東国原さんは、「壁にぶつかったり挫折したときにどう動くかで、人としての真価を問われると思う」と語りました。

まちの活性化やPRの秘訣を尋ねると、「よく聞かれるんですが、まちを盛り上げる特効薬はないんです。全国の皆さんを飽きさせないということを常に考えました」。どうやったら飽きさせないかを聞くと、「それは企業秘密なんです」と、東国原さんは笑います。時代背景や社会情勢など、いろいろなタイミングが合致したときに流行は訪れます。その流行を一時的なものにするのではなく、どうやって維持していくかが戦いだったとか。「県産品であれ観光であれ、良いものを送り出さなければならない。そのために、商品や見せ方を変え、常に新しいアイデアを出すようにしました」。アイデアの賞味期限を切らさないよう、新鮮であり続ける工夫をしたそうです。はやりそうなものや、時代は今何を欲しているのかが何となく分かると言う東国原さん。それは、県内だけでなく全国を自分の足で歩いて感じたそうです。

最後に、小江戸マラソンについて訪ねると、「ぜひ走ってみたいですね」と笑顔で答えてくれました。

会場は笑いが絶えませんでした

インタビューに答える東国原さん